



上智大学創立 100 周年
 上智短期大学創立 40 周年
 上智社会福祉専門学校 50 周年



マザー・テレサの来訪

No. 7

1. マザー・テレサの上智大学来訪

マザー・テレサは三度来日したが、そのたびに上智大学を訪問して講演した。1981 年は「ビューティフルなことって何」と題して講演。その言葉は約 1300 人の学生・教職員に深い感動を残した。1982



*Let us keep the joy of loving God in our hearts
 and share this joy with all we meet and so become
 an Instrument of Peace. God bless you
 M. Teresa*

1981 年の講演。下はマザー・テレサの直筆

校長も務め、1946 年にカルカッタからダージリンに向かう汽車に乗っているとき「最も貧しい人のために働くように」という啓示を受けた。そして 1948 年に教皇ピオ 12 世から修道院外で働く許可が出て、単身修道院を出た。そのとき持っていたお金は 5 ルピー（200 円）だったという。

最初に行なったのが路上に見捨てられた子どもたちを集めての街頭での無料授業だった。そうした活動に共鳴したかつての教え子たちが集まり、教会や地元の寄付金などが寄せられるようになる。1950 年に最も恵まれない人たちに奉仕することを目的とした「神の愛の宣教者会」を創



死を待つ人の家 撮影 沖 守弘

設。その活動は、食べる物も着る物もなく路上に捨てられ、病気になっても医者にかかれない人、

身寄りのない人に仕えることであった。この会の活動のもっとも特徴的なのが「死を待つ人の家」で、マザーの話によると路上で蛆虫や野鼠に食べられて顔のなくなった女性に出会ったのが切っ掛けだったという。病院からも道行く人々からも見捨てられて死んでいく貧しい人びとの中でも最も貧しい人。こうした人の死を見取る施設を作ったのだ。マザーは最初の 1981 年に上智大学を訪れたとき、こう語っている。

マザー・テレサは、路上に遺棄された人や孤児、ハンセン病患者、あるいはエイズ患者のために、インドのカルカッタ（現コルカタ）の「地上最悪の住宅環境」と呼ばれたスラム街に身を投じ、約半世紀にわたって貧者救援活動を行った。この＜愛＞の活動は全世界に知られ、1979 年にノーベル平和賞を受賞している。マザー死後も「神の愛の宣教者会」に引き継がれ、現在でも全世界で 4500 人ほどが活躍している。

マザーはインドに派遣された当初、カルカッタの聖マリア学院という裕福な子弟の学校で地理を教え、



1984 年 10 号館講堂で講演

また

「ある夜のこと、一人の女の人は体にうじがわいていて死にかかっていました。私は彼女の体中のうじを取り、体を拭きました。時間がかかりましたが、拭きおわってベッドに寝かせたとき、彼女は私の手を取り、

「ある夜のこと、一人の女の人は体にうじがわいていて死にかかっていました。私は彼女の体中のうじを取り、体を拭きました。時間がかかりましたが、拭きおわってベッドに寝かせたとき、彼女は私の手を取り、

優しい微笑をたたえて、私にたった一言『ありがとう』と言って息をひきとりました。』

マザーが受け取ったのは、「神の愛」であった。マザーは、「これが最も貧しい人のすばらしさだ」という。貧しい人はマザーが与えたものよりもっと多くの「神の愛」をマザーに与えたのだ。マザーはいう。

「それはなぜだか、わかりますか。それは貧しい人、一人ひとりが神様の子どもであり、愛し、愛されるために、神さまの同じ愛する手で造られたからです。」

2. マザー・テレサの講演からー「心の飢え」は豊かさのなかの貧困であるー

マザー・テレサが上智大学で行った講演の中から、特に印象的な言葉を紹介する。

「貧しい者は、パンに飢える人や路上生活者だけではありません。豊かさの中にあっても、愛に飢える人、社会から見捨てられる人はもっと貧しい。食べ物が無いことから起こる飢えは、ある意味ではずっと取り除くのがやさしいものです。それよりももっと困難なのは、精神的な飢え、愛の渇き、心の飢えの方です。私たちは祈り、信仰を深め、キリストを愛します。それは最も貧しい人に無償の奉仕をすることです。愛は最も身近な人から始まります。まず家庭から愛の実践をしてください。苦しみ悩んでいる者に、愛が痛みとなる時まで愛してください。」

「もし間違いが起きても子供の命を奪わないでください。助け合っその子供、胎児を受け入れるようにしてください。周りの人に助けを求めて、お互いにそして神様に、また家族に、顔を向けられるようにせねばなりません。なぜなら、ひとつの過ちが新たな悪を生んではならないからです。

あなたがたは、みんな若くて、未来と、新しい生活が待っています。結婚生活であれ、修道生活であれ、神さまがどのようあなたに呼びかけようとも、汚れのない清い心、愛と喜びと平和に満ちた心を与えられるようにしてください。」



撮影 沖 守弘

マザー・テレサは、講演の中で物質的に豊かである日本にも精神的に飢えている人が大勢いること、

その人たちの飢えに気づき、周りの者が救いの手を差し伸べなくてはならないことを伝えた。自分が誰からも必要とされていないと孤独を感じて自ら命を絶つ人や、自分の子供を中絶したり殺してしまう人が日本では年々増えている。来日して、日本の「心の飢え」を見抜いたマザーは、未婚の母と見捨てられた子供たちのための「子供の家」を東京都江東区「アリの街」に1981年に設立した。インドから派遣された4人のシスターによって活動がスタートし、現在は東京都の足立区と台東区、愛知県、大分県の4か所で未婚の母やホームレスの人びとのために活動を続けている。



マザー・テレサ(1910-1997)

マザー・テレサは、ノーベル平和賞を受賞した折も、「私は受賞に値するような人間ではないけれど、世界の最も貧しい人びとに代わってこの賞を受けます」と語った。そして授賞式では、いつものようにサンダルとインドの民族衣装サリーで出席した。「晩餐会もいらない」と辞退したという。